

山根一仁さん応援レポート

京都の秋音楽祭 開会記念コンサート

2015年9月13日(日)
京都コンサートホール 大ホール

錦秋の京都を飾る音楽祭。その皮切りコンサート

9月13日(日)から始まった「京都の秋 音楽祭」。
古都・京都の街が、さらに美しく輝く秋の季節に開催される、2か月半に渡る恒例の音楽祭である。
世界最高峰の指揮者や交響楽団の招聘はもとより、京都にゆかりのある演奏家たちが17の演奏会に出演するというこの企画。子どもたちが身近に管弦楽に親しむ「オーケストラ・ディスカバリー」、関西地方の音大生による「関西の音楽大学オーケストラ・フェスティバル」など、多彩なプログラムが繰り広げられる。



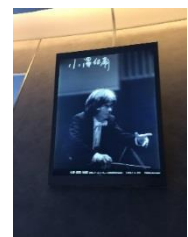
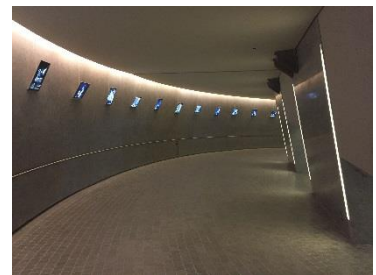
会場の京都コンサートホール



その開幕を飾る「開会記念コンサート」に、山根一仁さん(ヴァイオリン)がソリストとして登場。

指揮は高関健氏、管弦楽は京都市交響楽団。会場は、京都が誇るクラシックの殿堂 京都コンサートホール・大ホールである。

らせん状にぐるりと続く入口から大ホールまでの道のりには、歴代の名指揮者、名演奏家の写真がずらり。心憎い演出に、今からはじまる演奏への期待が高まる。



圧巻！の4分近いカデンツァ(ソロのみの演奏)



パイプオルガンと天井照明が印象的な京都コンサートホール。クラシックコンサート専用ホールであり、舞台を客席がぐるりと取り囲んでいる。

2ヶ月半に渡る音楽祭の開幕コンサート。京都中のクラシックファンが集まったかのように、客席は二階席、三階席まで埋まっている。

パンフレットには『...京響首席客演指揮者の高関健に、若手ヴァイオリニストの山根一仁という、注目の顔合わせだ.....山根は今年ようやく20歳になるというフレッシュな音楽家。だが.....すでにキャリアあるヴァイオリニストだ。そのレパートリーも広く、古典から二十世紀の作品までこなし、四十分を超える大作でも難なく演奏する。それだけに、前衛的書法も含まれるショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲で、どんな演奏をするか楽しみだ』との紹介文(音楽評論家山田真一氏の解説より引用)。

第3楽章の最後、四分近くに及ぶソロ演奏(カデンツァ: ソロのみの演奏)に、期待が高まる。

シックな和服姿で門川京都市長のご挨拶。京都市交響楽団60周年への祝辞、姉妹都市フィレンツェ、日本の文化芸術の都・京都へ文化庁招聘を！などと、京都ならではの話題を散りばめ、華々しくオープニング。

11台の管楽器による高らかなファンファーレ(デューカス:「ラ・ペリ」)が鳴り響いたのち、山根さん登場。

ショスタコーヴィチの代表曲の一つにして大作、「ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調」の演奏が始まった。

重々しく神秘的な第一楽章に客席は息を呑むかのように静まりかえる。ハーブ2台とのやわらかな調べ。ピアノシモの音色が美しく響く。

ぐっと曲調の変わる第二楽章、マリンバの打感と山根さんのヴァイオリンが共鳴する。

荘厳な調べの第三楽章、そして山根さんのソロから第4楽章。長大な難曲を堂々と見事に、聴衆をグイグイ引き込んで演奏終了。

「ブラボー！」と拍手の嵐の中、指揮者、コンサートマスターとハグする山根さん。大作を華麗に弾き終え、頬が紅潮しているようにも見える。



「大好きな曲。集中して、ベストな演奏ができました！」

止まない拍手に、アンコール曲、「パガニーニ：『24の奇想曲』より第24番」を披露。ふたたび難曲を華麗に聴かせた山根さん、聴衆に強烈な印象を残したもよう。

休憩のホワイエに飛び交う会話、「...凄かったね〜」「...寝ちゃったらどうしようと思いながら来たんだけど、凄すぎて、寝るなんてとんでもなかった〜」、聴衆のみなさん、驚きを口々に。

客席では、あらためてパンフレットの山根さんの紹介文を見直す方々も。「お若いのね〜」「凄かったわね〜」と。



終演後の山根さんに、本日の演奏について聞いてみた。

「指揮の高関先生、京都市響の皆様にも、素晴らしいサポートをいただき、大好きな曲を集中して弾くことができました。」

高関先生と京都市響のみなさんの人間性というか、リハーサルするときから、ずっと支えていただいて...それが大きな力となり、ベストな演奏をすることができました。」

演奏会が続く日々、しかも大作のプログラムが続く、そんな状況を「...もちろん大変です。ですが、ありがたいことです」と山根さん。

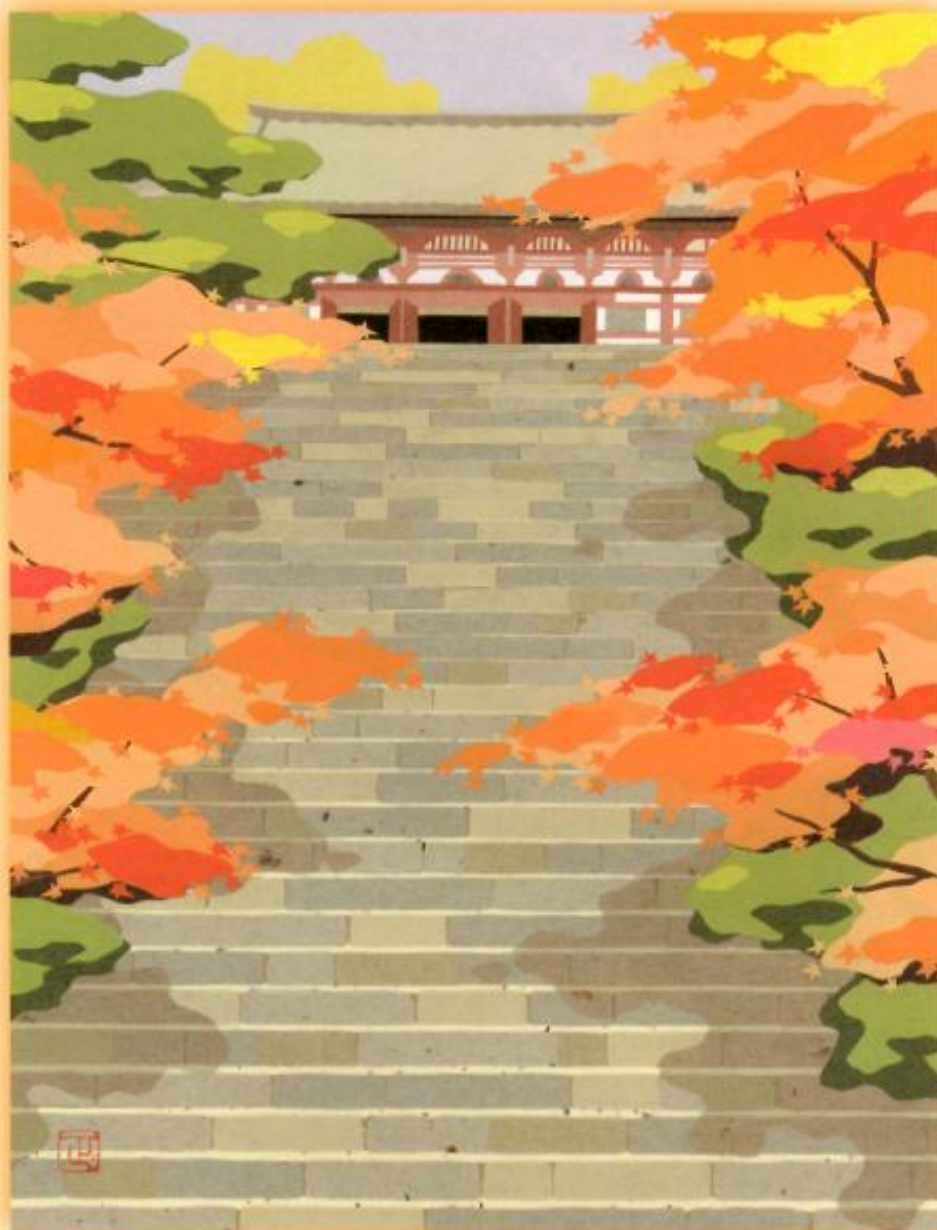
洒落た演奏衣装の写真を撮りそびれてしまったが、くつろいだ表情のショットを一枚。

山根さん、素敵な演奏でした。また聴かせてください！



〈山根さん演奏曲目〉
ショスタコーヴィチ：ヴァイオリン協奏曲
第1番 イ短調 op. 77
〈アンコール曲〉
パガニーニ：『24の奇想曲』より第24番





入江正樹「秋の神護寺」(複製画)

京都の秋 19th AUTUMN KYOTO MUSIC FESTIVAL 音楽祭
開会記念コンサート

2015年9月13日(日) 午後2時 開演 京都コンサートホール 大ホール

第19回京都の秋 音楽祭 2015年9月13日(日)～11月22日(日)

主催：京都市／公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団
協賛：ローム株式会社



平成27年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
京都府知事府民番号 第27A001号
発行 文化庁文化芸術振興費助成事業文化芸術振興費(15年度279-5号)



第19回 京都の秋 音楽祭 開会記念コンサート 19th Autumn Kyoto Music Festival Opening Concert

●プログラム

デュカス：舞踏詩「ラ・ペリ」ファンファーレ

Paul Dukas: Fanfare pour précéder "La Péri", Poème dansé

ショスタコーヴィチ：ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調 op.77

Dmitri Shostakovich: Violin Concerto No.1 in A minor, op.77

《休憩 20分》

ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 op.68

Johannes Brahms: Symphony No. 1 in C minor, op.68

指揮：高関 健 Ken Takaseki, conductor
(京都市交響楽団常任首席客演指揮者)

ヴァイオリン：山根一仁 Kazuhito Yamane, violin

管弦楽：京都市交響楽団 Kyoto Symphony Orchestra

高関 健 (指揮)



京都市交響楽団常任首席客演指揮者。および2015年4月より東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団常任指揮者。

桐朋学園在学中の1977年カラヤン指揮者コンクールジャパンで優勝。ベルリンでカラヤン氏のアシスタントを務め、タンゲルウッド音楽祭でもバーンスタイン氏、小澤征爾氏らに指導を受けた。日本のオーケストラはもとより、ウィーン交響楽団、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、クラウンフォーラム・ウィーン、ケルン放送交響楽団などに客演。2013年2月にはサントペテルブルグ・フィルハーモニー管弦楽団定期演奏会を指揮、ロシアの名門オーケストラから意欲的な働きを引き出し、聴衆や楽員から大絶賛を受けた。

広島交響楽団音楽監督・常任指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団正指揮者、大阪センチュリー交響楽団(現・日本センチュリー交響楽団)常任指揮者、群馬交響楽団音楽監督、札幌交響楽団正指揮者などを歴任。オペラでは新国立劇場公演「夕鶴」、大阪カレッジオペラ「ピーター・グライムズ」などで好評を博し、ブルーレス京都賞受賞記念ワークショップではブルーレス氏から、シチュエーション作品日本初演でアルゲリッチ氏とマイスキー氏からその演奏を絶賛されるなど、ソリストからも絶大な信頼を得ている。

第4回遠藤隆雄音楽基金賞(1996年)、第10回高崎秀雄メモリアル基金賞(2011年)を受賞。

東京芸術大学音楽学部指揮科教授。twitter.com / KenTakaseki

山根一仁 (ヴァイオリン)



1995年生まれ。2010年、中学校3年在学中に第79回日本音楽コンクール第1位、レウカディア賞、黒鷲賞、鷺見賞、岩谷賞(聴衆賞)、並びに全部門を通して最も印象的な演奏・作品に贈られる増沢賞も受賞。同コンクールで中学生の1位は26年ぶりとなる。以後、秋山和彦、井上道義、梅田俊明、大友直人、高関健、広上淳一、山田和樹等名氏とNHK交響楽団をはじめ国内のオーケストラと共演を重ねる。ベルリン・フィル五重奏団、マキシム・ヴェンゲーロフとの共演、トッパンホール『エスポワールシリーズNo.11』で最年少で快星される等、注目を集めている。

テレビ・ラジオへの出演もNHK-Eテレ『ららら』クラシック、テレビ朝日『聴きのない音楽会』等多数。第60回横浜文化賞文化芸術奨励賞を最年少受賞。2012年岩谷時子音楽財団第2回『Foundation for youth賞』受賞。2012年・13年度ロームミュージックファンデーション奨学生。第43回江刺記念財団奨学生。現在、桐朋学園大学ソリストディプロマコース特待生。これまでに故富岡儀、水野佐知香、原田幸一郎の名氏に師事。

京都市交響楽団 (管弦楽)

日本唯一の自治体直営オーケストラとして1956年創立。楽器講習会や音楽鑑賞教室、福祉施設への訪問演奏等にも積極的に取り組み、2007年「第25回京都府文化賞特別功労賞」「京都創造者大賞2007」受賞。2008年4月、第12代常任指揮者に広上淳一が就任。2014年4月からは常任指揮者兼ミュージック・アドバイザーに広上淳一、常任首席客演指揮者に高関健、常任客演指揮者に下野竜也が就任。2010～13年広上淳一指揮の定期演奏会ライブ録音CD「名曲ライブシリーズ」を3枚リリース。2015年「第27回ミュージック・ベンクラブ音楽賞」「第46回サントリー音楽賞」受賞。2015年6月には18年ぶりのヨーロッパ公演を成功させ、2016年の創立60周年という節目に向けて、名実ともに文化芸術都市・京都にふさわしい「世界に誇れるオーケストラ」を目指して更なる前進を図っている。



●曲目解説

山田 真一（音楽評論家）

今年の関会記念コンサートは、京響首席客演指揮者の高岡健に、若手ヴァイオリニストの山根一仁という、注目の顔合わせだ。高岡はキャリア、レパートリーともに日本を代表する指揮者。指揮という仕事は、聴衆の目の前に立つため、どうしても身振り手振りから音楽を作っていると思われがちだ。しかし、実際には、リハーサルによる音楽づくりがものをいう。その点、知識も経験も豊富な高岡は、入念なりハーサルにより、構成力の高い音楽づくりをする。今回、ブラームスとショスタコーヴィチという、クラシック音楽を代表する交響楽作曲家では、その力量を存分に聴くことができるだろう。一方、山根は今年ようやく二十歳になるというフレッシュな音楽家。だが、五年前、中学生では二十六年ぶりに日本音楽コンクールを制覇した、すでにキャリアあるヴァイオリニストだ。そのレパートリーも広く、古典から二十世紀の作品までこなし、四十分を超える大作でも難なく演奏する。それだけに、前衛的書法も含まれるショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲で、どんな演奏をするか楽しみだ。

■P. デュカス（1865～1935）：《ラ・ペリ》ファンファーレ

デュカスは《魔法使いの弟子》で知られる世紀末から二十世紀初頭に活躍したフランスの作曲家だ。ディズニー映画『ファンタジア』の中で、ミッキー・マウスがこの曲で演技をしたことから、世界的に有名になったが、本来はワーグナー的な濃厚なオーケストレーションが特徴の作曲家だ。《ラ・ペリ》は1911年に作曲されたバレエ音楽で彼の代表曲の一つ。その冒頭に演奏されるファンファーレは、単独で吹奏楽でも頻繁に演奏される壮麗な音楽だ。

■D. ショスタコーヴィチ（1906～1975）：ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調 op.77

1989年11月以降の世界の様子しか知らない人々には、信じられないことかも知れないが、世界が二つの陣営に分かれ、共産主義圏では人々の言動のみならず、思想や芸術表現まで政府から統制を受けていた時代があった。その真っ只中で作曲家として生きなければならなかったショスタコーヴィチにとって、「いかに自己表現するか」は、文字通り命を賭けた闘いだった。もともとポスト・モダナー的な前衛音楽を好んでいた彼は、政府にその姿勢を批判されると、民族的な要素を積極的に採り入れたり、平易な古典的な形式も用いた。この協奏曲は、そうした様々な要素を含んだ代表的な作品だが、作曲途中に知人の芸術家が処刑される事件などもあり、完成後七年間も公表されなかった。四楽章構成で、「夜想曲」と題された第一楽章に続き、スケルツォ、八つの変奏を持つパッサカリヤ（アンダンテ）、そして激しい民族的な舞曲のブルレスケで終わる。パッサカリヤの最後には、四分近くに及ぶカデンツァ（ソロのみの演奏）があり、ヴァイオリニストの力量が試される。

- 第1楽章 Nocturne : Adagio
- 第2楽章 Scherzo : Allegro non troppo
- 第3楽章 Passacaglia : Andante
- 第4楽章 Burlesca : Allegro con brio

■J. ブラームス（1833～1897）：交響曲第1番 ハ短調 op.68

ブラームスについて長い説明は不要だろう。十九世紀ドイツを代表する、ベートーヴェン後では最大の古典派の作曲家だ。作品の形式と楽器の使い方を何度も熟慮した上で音楽を作曲した。特に、古典派の柱である交響曲の作曲には慎重で、この第一番の完成には、構想から二十年もかかったと言われる。典型的な四楽章形式で、序奏を持つソナタ形式の第一楽章、ヴァイオリン独奏も活躍する三部形式のアンダンテ、メヌエットを経て、終楽章に至る。ベートーヴェンの第五交響曲のように、暗から明へという音楽のつくりで、ハ短調の第一楽章が、終楽章ではハ長調へと変化していく。しかし、全体としてはハイドンの古典派の均衡を重視した構成となっている。

- 第1楽章 Un poco sostenuto - Allegro
- 第2楽章 Andante sostenuto
- 第3楽章 Un poco allegretto e grazioso
- 第4楽章 Adagio - Più andante - Allegro non troppo ma con brio

※許可のない写真撮影、録音、録画はかたくお断りします。 ※会場内での携帯電話の電源をお切りください。

【コンサート・パンフレット裏表紙】

